

【趣旨説明】

説明者：山崎友子（災害文化研究会世話人代表）

災害文化研究会のセッション「災害文化の顕在化のこころみ」にお集まりいただき、ありがとうございます。ここ釜石は、気温10度、超がつくほど快晴です。本日は災害文化研究会の会員5名の発表とスペシャルゲストとして「釜石漁火の会」のお二人をお迎えしています。

「災害文化」というと災害に関わる祭礼等の習俗を思い浮かべられることが多いと思いますが、東日本大震災後、ここ釜石をはじめとし三陸沿岸で見られる災害との闘いから、「地域の力」としての災害文化が見えてきました。

一方、東日本大震災から10年が経過し、防災の専門家、防災教育の立場から問題点が指摘されています。

- ① 被災体験・教訓をどのように語り継ぎ、事前の備えに実効性を持たせるか（今村、2021）
- ② 研究知見の積み重ね、市民の減災知識の増加があっても、減災行動につなげていない（防災教育の立場から、大木他、2015年；河田、2019）

これらの問題点の克服のヒントとして津波災害があります。津波は低頻度災害です。その体験が、三陸沿岸で何十年も、世代を超えて、どのように語り継がれてきたかを知ることは、1番目の課題を乗り越えるヒントとなります。また、3.11では多くの方々が犠牲となられ、未だに行方不明の方もいらっしゃるのですが、岩手県沿岸の小中学校では学校管理下の犠牲がゼロ。犠牲を少しでも抑えることができたのがたまたまではないことを知ることは、二つ目の課題を乗り越えるヒントとなります。

近年、極めて甚大な被害を及ぼす災害や新しいタイプの災害が頻発し、気候変動や災害は、私たち地球に生きる者にとり持続可能性を脅かす大きな脅威となっています。その今、「地域の力」として災害文化を捉え、コミットしていくことは、「持続可能な未来の地域創り」にとり大きな鍵となると考えています。

【Part 1】災害文化とは～見て、聴いて、知って

★第1発表者：熊谷勳氏（大船渡市立綾里公民館館長）

綾里小学校での児童演劇『暴れ狂った海』を中心に

*大船渡市立越喜来小学校在職中に、明治・昭和の大津波にあった地域の学習を始め、綾里小学校では児童演劇『暴れ狂った海』を実践。

<要旨>

○平成8年度と平成9年度の三陸町立越喜来小学校での実践

避難訓練が形骸化しつつある現状では、地域の災害の大きさを実際に目で見て歩き、数字で確かめ、体験者の話を聞くことが重要である。

さらには、学校管理下外での子どもたちの命を守るために、安全マップを利用して住居から学校までの通学路の安全を願い、家庭との連携が大切なことを明確にした。

○平成18年度と平成19年度の大船渡市立綾里小学校での実践

津波の恐ろしさについて漠然とは理解しているが、実際に津波に遭遇した場合の命の大切さや、住居や家族を失った場合の悲しみや生活困窮などは、小学生として具体的に考えるまでには至っていない。

直接声に出し体にしみこませて、感情面でとらえ、自分が被災者になって演技をし、観客に訴えることによって、本当の津波の恐ろしさを知る。これが演劇の強さである。

方言でのセリフは、父母や祖父母、地域の人たちを巻き込むための手段であるが、防災教育は子どもたちと地域全体が同時進行しなければならない。

○退職後の活動

県内外で風化防止のため、『『暴れ狂った海』－被災状況とその教訓』と題して、過去の津波被害等も含めて伝承活動に取り組んでいる。

★第2発表者：佐々木力也氏（元宮古市立田老第一中学校校長）

田老第一中学校の震災体験と地域の復興に向けた教育を中心に

*東日本大震災当時、宮古市立田老第一中学校の校長。避難から復旧時、復興へ向けての学校における教育の土台を築く。田老第一中学校と岩手大学の合同授業は、震災前の2010年に始まる。

<要旨>

学校教育の中にも災害文化が存在するのであれば、それを顕在化する価値は大きい。震災の恐怖は、常に日常生活の傍らにある。しかし、あれから10年が経過した今、震災の学びが学校現場から遠ざかっているように思える。したがって、風化が悲劇を生むのであれば、震災の教訓や学びを共有することはとても大きな意味を持つ。

田老一中の生徒が残した震災の教訓と学びの断片を紐解く。田老湾に立った水柱、赤沼山を這いつくばりながら振り返ると瓦礫が校庭を埋め尽くす光景は未だに脳裏から離れることはない。また、震災直後のボランティア活動、心をつなげて行った復興教育活動での生徒の雄姿も記憶に新しい。まずは、震災当時の状況、学校経営の概要、復興教育活動の事例を紹介したい。そして、いわての復興教育の意義、生徒作文集「いのち」や震災展示資料室「ボイジャー」の存在

価値などについて述べたい。

時代を問わず、学校においては「自分の命を守る力、他の人の命を支え守る力の育成」が極めて大切である。学校における災害文化について考えていただければ幸いである。貴重な発表の機会を与えていただいた。ご批正を仰ぎたい。

<スライドの説明>

* 1～27は、ppt スライド番号

1. 私は、元宮古市立田老第一中学校の教員（校長）です。災害文化研究会の会員でもあります。どうぞ、よろしくお願いします。

2. これから、震災直後の状況を振り返りたいと思います。また、平成23年度からの学校経営方針について述べ、田老第一中学校の「震災の記録と発信」を柱とした「復興教育の実践」について紹介します。さらに、これからの教育に期待することについて発表させていただきます。

3. この写真は、震災前の田老町の全景を映したものです。黄色の○で囲んだところが、田老第一中学校です。震災当時の田老町の総人口は4,443人、田老第一中学校の生徒数は129名でした。そして、町は、総延長約2.4km(2,433m)の防浪堤で囲まれていました。

4. 3月12日の早朝の田老の風景です。徹夜明けの冴えない頭で翌日の朝を迎えました。白々と明ける早朝、はっと息を呑む田老の町の姿は「無常の雪」で覆われていました。冷気と靈気が混同しているかのような青白い光を放ち、「津波の後には雪が降る」という言い伝え通りの光景が目の前に広がっていました。

瓦礫の下に埋もれたまま寒さで凍えて亡くなった人がいると思いました。ある生徒が、「俺の家も終わった」とつぶやきました。本来であれば、3月12日(土)は卒業式の日でした。多くのことが頭に浮かびました。大きな震災になってしまったということ、生徒のこと、保護者のこと、学校のこと等がとても心配になったことは言うまでもありません。「しっかりしなければならない。」と自分に言い聞かせました。今日の卒業式はできない。「まずは、朝から保護者が迎えに来ることへしっかりと対応していかなければならない。」そう自分自身を鼓舞しました。

5. ここで、簡単に、津波の歴史を紐解きたいと思います。田老第一中学校は、明治29年、昭和8年の三陸大津波に遭っても、校舎や校庭まで津波が押し寄せなかったこともあり、校舎全体で「津波シェルター」となっていました。しかし、今回の津波は想定外でした。

防浪堤の整備は昭和三陸大津波の翌年、昭和9年から始まり、町全体を囲む総延長2,433メートル、高さ10メートルの長大な防浪堤はかつて「万里の長城」と呼ばれていました。

しかし、東日本大震災による津波は、防浪堤を超え、田老の町を飲み込み、甚大な被害を及ぼしました。

6. 東日本大震災津波での、田老第一中学校の被災状況について述べます。年度が変わり、23年度当初のデータとなります。この表にありますように、家屋が損壊した家庭は、全体の53%に上り、父親や母親を震災で亡くした生徒は5名いました。要保護と準要保護生徒数ですが86名、全体の66%になりました。何らかの経済的な援助を受けることになった生徒がたくさん出てきました。当時のことを思い出しますが、震災の後の卒業式では、制服をすべて流され、体操着で式に臨む生徒が多数いたことを思いだすことができます。
7. 震災直後に、防浪堤から撮影した1枚です。町全体ががれきで覆われました。
8. 平成17年度から、本校が「津波シェルター」（市教委指定）となっていました。この写真にありますように、今回の津波では本校の校庭及び校舎の1階まで、がれきが押し寄せてきました。当時、129名の生徒の他、近くの住民も校庭に避難していました。
3時10分頃に、田老湾に、大きな水柱が立ったことを職員（用務員の琴畑さん）が発見し、「津波だ、逃げろ。」の声で、生徒も職員、住民も協力しながら高台に逃げ、全員が一命をとりとめることができました。
9. 生徒の活躍ぶりについて述べます。震災直後から、写真にありますように、スタッフジャンパーを着て支援物資を運搬する等のボランティア活動を続けた数多くの生徒たちがいました。自分の家屋が被災したにもかかわらず、前向きに田老の復興のため、厳しい寒さの中、ボランティア活動に果敢に取り組む姿を見て、田老一中の生徒を誇りに思ったことは私だけではなかったと思います。
10. 「全身全霊をかけて、復興教育に当たりたい。」そう思いました。ここで、平成23年度の学校経営方針について述べます。経営の2つの基本方針について提案しました。一つ目は、「生徒や家庭の生活現実を十分に理解し、教育活動やPTA活動を行うこと」二つ目は、「田老や岩手の復興のため、明るい未来を展望し努力することができる生徒を育成すること」です。
しかし、生徒131名で新年度を迎えましたが、隣接する田老第一小学校での間借り生活が長くなり、器物破損等の数々の生徒指導事案が絶えない状況となりました。そこで、なによりも大切にすることは、生徒の理解と心のケアでした。
11. 平成24年度の学校経営の重点テーマを紹介します。経営概要を、スライドにありますように、「震災の記録と発信」、「命の教育活動」としました。
震災発生から約1年が経過し、岩手県では、復興教育を掲げ、内陸部の学校と沿岸部の学校との交流活動などを積極的に行う横軸連携活動も行うようにな

りました。

12. ここで、復興教育について説明します。スライドにありますように、岩手の復興教育は、「郷土を愛し、その復興、発展を支える人材を育成するために、各学校の教育活動を通して、「いきる、かかわる、そなえる」の3つの教育的価値を育てること」です。

13. そして、経営の柱である「震災の記録と発信」「いのちの教育活動」をすべての領域で形にしていくための復興教育活動を実施していきました。具体例を述べます。まずは、津波体験作文集「いのち」の作成です。約1年かけ、3回忌にあたる平成25年3月11日に岩手大学地域防災研究センターから発刊していただきました。

14. これは、当時の3年生が作文集を紹介している場面を撮影してもらった1枚です。子ども達にとっても田老にとっても、この作文集が将来きっと役立つと思いました。

この作文集『いのち』には、震災当時の避難行動、亡くなった方々への慰霊、田老の町の未来を描き復興への寄与する力強い意思などがすべてのページに盛り込まれています。「風化が再び悲劇を生む」とすれば、田老一中のこれからの役割は大きいと思っています。この作文集をとおして、どのような時代にあっても「自分の命をしっかりと守ること、そして、他の人の命を支えることの大切さ」を伝えてほしいし、「田老の未来の姿を語り、復興への夢」を描いてほしいとのねがいをもちました。

15、16. 作文集「いのち」の教育的な価値についてまとめてみました。どうぞお読みください。

17. 1学年（平成24年度）が、宮古地区（磯鶏）の災害廃棄物破碎・選別作業を見学した時の写真です。真剣に見学する生徒の眼差しを見て取ることができます。廃棄物選別作業で山積みされた品々は亡くなった人々の遺物であるかもしれません。子ども達にとっては、震災前に日常的に使っていた思い出の品々であるかもしれません。眼前で破碎され選別されている作業の現実を見て、生徒各々の胸に焼き付いたおもいは計り知れないと思います。この見学は、復興教育の一つとして実施された優れた教育活動であると振り返ることができました。

18. 宮古市内連合音楽会も忘れることのない活動でした。合唱曲は、田老の「未来」をテーマに生徒と教員が一緒に作詞作曲しました。全生徒はTシャツを着用しました。背中には「果てしなき大海原へ 我ら進まん あきらめず ひるまず 手をつなぎ 心をあわせ 未来への道作るべし」とプリントされています。絵柄全体のテーマは、「ボイジャー」です。合唱を終えた瞬間、会場からは大きな拍手が沸き起こりました。「霧が晴れて元に戻ってほしい、本当にそ

んな気持ちです。」と感想を述べた生徒がいました。

19. この写真は、県内の横軸連携等により、盛岡市内中学校との交流活動を実施した場面です。盛岡市立松園中学校で、震災の教訓や学びを発信する活動として、昭和8年の津波を題材とした田畑ヨシさんの紙芝居の朗読を披露しました。

復興教育は前の通りの活動に戻すことではなく、新しい視点に立ち質の高い教育活動にしようとする意識を持つことが大切です。そして、今までの活動が次の活動にどう影響を与え、繋がっていくかの視点を持つことが大切であると考え、田老一中の復興教育を進めていきました。

20. 震災の記録にも力を注ぎました。田老第一中学校に、震災資料展示室「ボイジャー」を設置しました。国内外からたくさんの物心両面のご支援をいただき、元気をたくさんいただきました。生徒に生きる力を与え続けた寄贈品や震災関連の資料は、復興教育の足跡、記録と記憶を残すものとして価値があると思います。

21. 校長室に3月11日で終わっている日めくりカレンダーがありましたが、額の作製を岩手大学に依頼しました。その他に、新聞記事、田畑ヨシさん「つなみ」の絵本、大型写真、学校行事写真、各種スポーツ団体、個人からの寄贈品等を現在も展示しています。

22. ここで、地震と津波に関わる百科事典のような記録誌を紹介したいと思います。昭和9年3月3日に発刊された「田老津波誌」です。優れた児童作文が何点も掲載されています。昭和8年3月3日の大津波を多角的な視点でまとめています。当時の田老尋常高等小学校の先生方が、震災後たった一年でまとめた力作であり一読に値します。

23. 田老町は、津波とともに生きてきた町です。そして、津波の教訓を内外に知らせ、防災教育や地域防災に力を入れてきた町です。その一つの証拠が、今は新しい防浪堤を建造するために粉砕されて存在していませんが、第3防浪堤に描かれていた総延長220mの壁画です。

全ての壁画は、芸術的な色彩を帯びていました。目を引いたものは、「雨二モマケズ」「風二モマケズ」の壁画でした。宮沢賢治さんは明治29年に生まれ、昭和8年に亡くなっています。そして、それらの年に、三陸大津波が襲来しています。壁画は、2つの大震災津波の歴史や教訓を決して忘れてはならないというメッセージを全世界に伝えるために存在していたわけです。

24. 田老第一中学校の校歌の3番には、防浪堤と津波という言葉が校歌に謳われています。「防浪堤を仰ぎ見よ 試練の津波幾たびぞ 乗り越えたてし わが郷土 父祖の偉業や 跡つがん」津波の歴史や受け継がれてきた教訓が学校教育、地域防災にも影響を与えている校歌です。

なぜ生徒たちが何度も津波の被害に遭っても、悲しみを力にし、乗り越えることができたのか。そして、甚大な津波被害に遭っても、学校や地域の復興のために熱心にボランティア活動を行い、震災の記録と発信の中で、教訓や学びを伝えようと努めることができたのか、その原動力や背景をなすものが、この校歌にみることが出来ます。

学校や地域に根ざした災害文化は、一朝一夕で形成されるものではありません。歴史を踏まえ、学校と地域が一体となって災害の教訓や学びを継承し、それらを守っていくことが極めて大切である、ということも示唆している素晴らしい校歌であると思います。

25. これからの学校教育の中では、「自分の命を守る力、他の人の命を支える力の育成」「いのちの教育」をねらいとした活動が大切であることの認識を持ちたいと思います。

そして、あらゆる活動において、人と人のかかわり、学校と地域のかかわりや交流、連携が極めて大切です。そして、なによりも大きな悲しみに遭っても、それを力にすることができるたくましい人間をつくっていく教育が大切であると考えます。

26. これまで学校経営の内容と復興教育の一端を紹介してきました。田老の子ども達への大きなねがいがあります。それは、田老の児童生徒一人一人に、田老や岩手の復興や発展の担い手になってほしいというものです。そのためには、学校教育の中では、いわての復興教育の理念を大切にし、ねがいやねらいを明確にしながら一つ一つの教育活動を大切に扱うことがとても大切であると思います。

最後になりますが、私自身、「困難時代に遭ってもひるまずに常に前を向いて歩いていくことが大切である」と思っています。これも田老から教えていただいた学びの一つです。

27. ご清聴ありがとうございました。(最後までお読みいただきありがとうございました。)

<参考文献>

岩手県教育委員会(2019):『「いわての復興教育」プログラム第3版』

佐々木弘平編(1934):『田老津波誌』,田老尋常高等小學校

高山文彦(2012):『大津波を生きる』,新潮社

女子美術大学芸術学部(1992):『田老町防潮提壁画「集い」について』,女子美術大学

山崎憲治、本田敏秋、山崎友子編(2014):『3.11後の持続可能な社会をつくる実践学』,明石書店

山崎友子編(2013)：『いのち 宮古市立田老第一中学校津波体験作文集』，岩手
大学地域防災研究センター

吉村昭(2004)：『三陸海岸大津波』，文春文庫

質疑応答と中まとめ

○発言1：琴畑様（宮古市立田老第一中学校職員）

3.11 時避難していた校庭から見た「水柱」とその後の避難行動、
学校としての活動について

○発言2：大棒様（NPO 田老理事長）

ぼうさいこくたい 2021 でプレゼンブースで発表。その前に実施したア
ンケート結果について。驚くほど、過去の津波について知らない結果
が出た。

- ➡ 【気づき】津波常襲地でも10年で体験が忘れられていく、しかし、それを
阻止しようという地域の学校、地域住民がいる。これが力となっている。…
地域の災害文化の継承・醸成

【Part 2】 災害文化とは～気づいて

東日本大震災が、研究者にどのような気づきを与えたかを、本研究会世話人で岩
手大学の教員でもあるお二人から伺います。

★第3発表者：田中成行氏（岩手大学准教授）

「命を守る言葉」を中心に

*ホワイトボードを使つての発表。動画をご覧ください。

<要旨>

東日本大震災後、東京学芸大学附属小金井中学校にて古典教材『おくのほそ道』
の発展教材として、被災地岩手県宮古市の、明治昭和大津波で大きな犠牲を被つ
た姉吉地区で生まれ、その教えを守り高所移転し今回の大津波では全家屋が無
事であった「姉(あね)吉(よし)の碑(いしがみ)」の掛詞等の作者の工夫を「命を
守る言葉」として学び「私の碑文」を創作する教材化をした。小金井中では地震
や津波の他世界の水や食糧事情、いじめや自殺を防ぐ呼びかけ、日頃自分を支え
る親友や両親への感謝等多様な作品が生まれ、その後宮古市立田老第一中学校
98名の生徒の皆さんと実践させて頂き、実際の津波の被災の体験を生かす呼び
かけ決意、命の源の故郷の海や、部活や言葉のいじめ等日常生活の尊さも見つめ
直せた。岩手大学ではコロナ禍の中入学式も対面授業もない基礎ゼミ一年生が
「コロナ禍碑文」を創り、動画やラップ等個性を発揮し日々の生活を見直し前向
きに希望をもって生きる意志を伝え合い「命を守り育む言葉」を追究した。

<説明>

2011年の東日本大震災後、当時勤務していた東京学芸大学附属小金井中学校の生徒たちの中から何かできることを実践したいという声上がり、生徒会等の活動も始まった。国語科としてできることを模索した中で、3学年の定番の古典教材の松尾芭蕉作である、『おくのほそ道』の発展教材の副教材として被災地である岩手県宮古市にある「姉(あね)吉(よし)の碑(いしがみ)」の碑文を「命を守る言葉」として取り組むこととした。

『おくのほそ道』の中で芭蕉が東北の旅の途中に「壺(つぼ)の碑(いしがみ)」の碑文を見て、涙ぐんで感動したのは、「自然も人も月日の中で変わってしまうのに、石に刻んだ文字は残り、それを書いた人の心は変わらず伝え続けられてゆく」ということであった。

同じように、東北岩手県宮古市にある漁村である「姉吉地区」は明治と昭和の二度の大津波で全滅した尊い犠牲と教訓を生かし、「何とかして命を守りたい!」という願いを込めて昭和八年に「大津浪記念碑」が刻み付けられ、その教訓を生かして高所に移転していて、今回の大津波では全家屋が無事であった。その「姉吉の碑」の碑文の「作者の工夫」を、「命を守る言葉」の工夫として教材化した。石碑には大きく分けて二種類ある。「あった事実を詳しく記録して漢文等で残す」ものと「命を守るためにどうすべきかを呼びかける」ものである。「姉吉の碑文」は后者であり、二度の全滅の悲劇があった土地だからこそ、二度と犠牲を出さないための究極の方法を、碑文の文字で呼びかけていることに気づいた。他の地域の呼びかけと決定的な違いがあった。それはまず「逃げろ」という呼びかけがないことである。

「津波から命を守る究極の方法とは何か?」「子どもや老人など「弱者」をも守る究極の方法とは?」それを伝える碑文の文字の工夫に注目すると、上段と下段で独自の工夫があった。上段が詩的な表現である韻文であり、下段が説明的表現である散文である。

大	高さ住居は	明治廿九年にも
津	児孫能((の))和楽	昭和八年尔((に))も津
浪	想へ惨禍の	浪は此処まで来て
記	大津浪	部落は全滅し生
念	此処より下に	存者僅かに前尔((に))二人
碑	家を建てるな	後に四人のみ幾歳
		経るとも要心阿((あ))連((れ))

「弱者」である「逃げることも不自由な人々の命を守る」ための究極の方法は「高所移転」である。そのことを呼びかけ、心に刻み付けられるような覚えやすくする作者の工夫をまず「上段」から読み取ると、

- ・七五調である。七七七五・七七とあり七七七五調の都都逸調(どどいつちょう)である。都都逸とは江戸時代から流行した恋の流行歌謡であり、次の例のように明快で覚えやすい。

ゝ信州(しんしゅ)信濃(しなの)の 新(しん)そばよりも わたしゃあんたの側(そば)がよい

江戸時代から流行し、昭和8年当時も流行歌謡として漁師町でも謡われた「都都逸(どどいつ)節(ぶし)」や「甚句(じんく)」「娘(むすめ)義太夫(ぎだゆう)節(ぶし)」とも重なる。釜石など今も相撲甚句が謡われ新作も生まれている。

- ・「高き住居(すまい)は児孫(じそん)の和楽」の、「児孫」とは「子」や「孫」の意味だが、さらには自分では逃げることのできない赤ちゃんや高齢者などの「弱者」をも表しているといえよう。そのような方々の命を守り、「和楽」「幸せな生活」を、反対の「惨禍」から守るためには、「高所移転」をして「高き住居」に住むことである、と宣言する。この言葉は田老地区など大きな港町では当時はなかなか主張が難しかったであろうが、二度も全滅した小さな漁村の「姉吉地区」だからこそ主張できた言葉といえよう。
- ・「想(おも)へ(え)惨禍の大津波」の「想へ」は、「倒置法」として「思い出せ」と呼びかけ、「何を？」と読み手に考えさせて、「あの悲惨だった大津浪の時の出来事を」と、かみしめさせる効果がある。同じ地域の石碑のほとんどが「想へ」なのだが、一箇所荒巻地区は「忘るな」とあり、その方が自然な表現とも考えられた。しかし、現地を訪ねてみて気づいた。そこは、「旧重茂(おもえ)村」であった。つまり、「思い出せ、重茂村の悲惨だったあの大津浪のことを」という意味で、動詞の命令形の「想(おも)へ(え)」と、地名の「重茂(おもえ)」が「掛詞」となっているのがあった。
- ・「一字下げ」の文字で視覚的にもリズムを作り、「想へ」「建てるな」の命令形での切実な呼びかけの工夫など。

「下段」は、年号の「明治廿(二十)にじゅう)九(<)年」「昭和八年」や、生存者の「前に二人」「後に四人」のように具体的な情報を、数字を並べてわかりやすく説明している。

国語の二つの要素である詩的な表現の韻文と説明的な表現の散文の特長をフルに発揮して「命を守る言葉」に結晶化している碑文といえよう。二度の全滅という悲劇があったからこそ「愛する人の命を守りたい」という究極に研ぎ澄まされた言葉が生まれたともいえよう。

では、この「姉吉の碑」の碑文の作者は誰であろうか。生き残った方々が刻み付けるのが自然であろうが、実際にこのような文章をまとめるのは容易ではあるまい。そこで参考になるのが、山下文男氏の『津波と防災—三陸津波始末—』(古今書院、2008年)や、『君子未然に防ぐ—地震予知の先駆者今村明恒の生涯

一』(東北大学出版、2002年)に紹介されている地震学者今村(いまむら)明恒(あきつね)博士の存在である。50年以内に東京に大地震が起きる可能性があるから火災等に備えよと主張し、「法螺吹き」と批判されたが18年後の1923年関東大震災が起こり、地震の「神様」と呼ばれた。氏は「予言」ではなく震災の「予防」をしたかったのだが雑誌等では「予言」の方が注目され、被害を未然に防げず、その反省を生かして昭和8年(1933)の三陸大津波の後の高所移転の推進と朝日新聞の義援金による石碑の建立に深くかかわったとされる。今村博士は当時流行していた浄瑠璃の流派である義太夫節の娘義太夫の名人として人気を博した豊竹呂昇に師事しており、その芸能の言葉の工夫が生かされているとも考えられる。

つまり、直接の被災者ではなくても、その被災者の方々の心に寄り添い、今まで学んだ様々の国語の「言葉の工夫」を活用して、「自分事」として「命を守る言葉」を創ることができるということである。

東京学芸大学附属小金井中学校では「姉吉の碑文」の「作者の工夫」を「命を守る言葉」として学び、「私の碑文」を創作した。地震や津波に対するものだけでなく、世界の水や食糧事情への呼びかけや、いじめや自殺を防ぐ呼びかけから、身近な学校生活の部活での熱中症対策から、日頃自分を支えてくれる親友や両親への感謝、お弁当を毎日作ってくれる母への感謝など、多様な「命を守る言葉」が生まれた。

2014年、岩手県宮古市の田老第一中学校の98名の生徒の皆さんに、「姉吉の碑」の「作者の工夫」を紹介し、「命を守る言葉～「私の碑(いしづみ)をつくらう」という授業を实践させて頂いた。筆者自身も「一人の作者」として「愛する人を守るためには 津波から 弱者も救う 高所住み 夜でも皆が逃げられる 道を作りて 共にかたろう」と創ってみた。ご家族を亡くされた方も全員、先生方の親身なご指導に支えられて書き上げることができた。「地震があつたら高いところへまず逃げろ 大切な人は避難所にいる そこで互いに助け合うべし」「親と決めとく 地震のときの にげ道と にげる場所 安心するな もっと上へ」「防浪堤 あつても逃げろ 高台へ 津波が来たら てんでんこ」や「変えていった 私たちの未来を 乗り越えた大きな試練を 伝えよう 私たちが伝えよう」と実際の津波の被災の体験を生かした呼びかけや決意だけでなく、日常生活に戻る中で「昼下がり 海へ行こうとチャリをこぎ 一人で行った櫛内漁港 惨事を忘れる美しさ 海も空も包み込む/自分は海があるから失うものもあるが、海があるから得るものもあると思った」と韻文と散文で命の源の故郷の海を見つめ直す作品や、「気付いてる?人が傷つく その言葉」という日常の言葉のいじめや「カキン エラーはだめだ エラーしたくない その考え マイナス思考が マイナー思考だ」という部活への真剣な取り組みの言葉も生ま

れた。これらの作品を読んだ東京の中학생達は、自分達には被災地の方々の大変さはわかりきれない、という不安を訴える意見も出てきた。しかし、野球をやる生徒が「地震がきても 津波がきても 大事なものを 無くしても 甲子園への 大きな夢は そこにある」と、共通の夢を見出して呼びかけ共感された。入間市に住む生徒は「ウロウロしているまに 大被害 黒波見えぬと 気をぬくな 守れ 自分の命・自分の町 小さな備えが みなを救う」と「いるま」の掛詞を使い、被災地でなくても備えの大切さを呼びかけた。被災地の生徒さんとの交流と対話が、その心に互いに寄り添うことにより「自分事」として実感し合い本気で創作し合う機会を生み出すことができたと言えよう。

岩手大学においては、2020年8月、コロナ禍の中で、入学式もなく、8月まで遠隔の授業でキャンパスにも来ないで、8月まで対面の授業もなかった基礎ゼミの1年生21名が「姉吉の碑文」の「作者の工夫」を生かして「命を守る言葉」として「コロナ禍碑文」を創った。まず全員がコロナ禍の気になるニュースと自分の考えを画面を通して発表し合い意見を交流し合った後、作った作品を発表し合った。筆者がまず「コロナかに 恋しいからと 逢うのでなく 大切なとき愛するからこそ 逢わないで いのちをまもり 恋を愛に育てる 人でありたい」と創ったが、学生達は「コロナで気づいた 日々の幸せ 自分の行動 改めろ 少しの我慢が 誰かを救い 少しのきもちが 未来を変える」「シンシな心は 事態の収束 凶れこの先 コロナ渦(うず) 己を守り 誰かを救え」「コロナ禍で 自分を失う ことなかれ」「誰もがこのようになると想像していなかった デマはウイルスの感染のようにすさまじい早さで広がった 世界中が混沌 町中が閑散 いつもと違った生活 みんなする検索 暗い世界を明るくするのは人々の希望 絶望を希望に変え、生きていこう」などと動画を創ったり、ラップ調で歌ったりと、工夫を凝らし個性を發揮して、日々の生活を見直し、前向きに希望をもって生きる意志を伝え合うことができた。

筆者自身コロナ禍の中、直接面会できぬまま5月と9月に老父母を亡くしたが、希望をもって生きる生き方を学生達の言葉から教えられた。「命を守る言葉」「命を育む言葉」をさらに共に追究してゆきたい。

★第4発表者：大野眞男氏（岩手大学嘱託教授）

防災・復興を支える言葉の力—釜石での活動を中心に—

<要旨>

災害対応事業について時系列に整理すると、一般的に三段階が存在し、関係する言葉の機能も違っている。1) 防災・減災段階 2) 発災時の支援段階→言葉の通達的機能（意思疎通の道具）3) 再興支援段階→言葉の象徴的機能

象徴的機能とは、地域や集団の文化と密接に結びついたものであり、アイデン

ティティー表出機能とも呼ばれる。東日本大震災で被災したコミュニティが再興されていく際には、言葉の地域アイデンティティー表出に関わる機能が、傷ついた地域コミュニティの再生と深く結びついていた。「がんばっぺし、釜石」などというペンキ書きの復興メッセージは記憶に新しい。あえて方言でしか表すことのできない、地域の仲間意識や連帯的感情が込められている。方言で昔話を語る女性グループ「漁火の会」が釜石に10年前にできた。彼らと連携することで、方言語りを通じて被災した地域の活性化を支援する活動を8年間続けてきた。その一部として、方言昔話絵本『ふるさとの昔話』の作成、方言昔話の語りの会「おらほ弁で昔話を語っぺし」の継続的開催などがあげられる。本日は、北村弘子さんと藤原マチ子さんに、方言による昔話と甚句を披露していただく。方言の力に気づいていただけけるものと思う。

☆スペシャルゲスト 釜石「漁火の会」から

・北村弘子氏：昔話「命てんでんこ」

明治の大津波（1896年6月15日発生）を素材にした、釜石に伝わる昔話。子ども3人を抱えた女性の避難の様子を述べ、「親でも子でも赤子でも命を守れよ」という教えが「命てんでんこ」という言葉となっているという昔話を、方言で情感豊かに語って伝えられました。

・藤原マチ子氏：甚句「釜石あの日あの時甚句（願い事）」

平成25年5月11日、北村弘子氏作。唐丹へ家族を探しに行った方々の言葉をもとに。相撲の盛んな大槌出身の藤原マチ子氏が家族を亡くした悲しみを甚句の節回しに込めて唄って伝えられました。北村弘子氏は隣で合いの手と手話を。

*全文は別紙添付

災害文化研究会
複製禁止



- ・「同じ体験をした」フロアの方から感極まったとの発言があった。

【Part 3】災害文化の力～未来へ向けて

★第5発表者：山崎憲治氏（災害文化研究会世話人）

被災という大きな苦しみを通して未来への可能性が創られている。被災地の現場に立って、見て、聴いて、実態を通して、地域の災害文化に気づき、知ることが過去と現在をつなぎ、未来を創ることになる。

本発表では、東日本大震災の犠牲者が65歳以上の高齢者に偏っていることから、高齢社会日本が持つ脆弱性を読み解くことができる。一方、これとは対照的に10歳から14歳が犠牲者数のボトムを形成する。これは災害学習が進み、集団で避難した姿を反映している。災害学習は災害文化を構成する重要な要素である。衝撃をもって災害をとらえることでは不十分である。復旧・復興さらには予知・警報の段階も含めトータルに災害をとらえることが不可欠だ。さらにそれぞれの段階ごとに災害文化が生まれている。文化は危機に直面する技術であるとするなら、災害文化を構成する事象を、基本的人間活動に照らして位置づけてみる事が出来るし、さらに人間活動そのものを問うことになり、この問いが再び災害文化の価値を明らかにするという関連が想定される。また、災害文化が問う課題は、コミュニティ・地方・国・地球にまで関連しあって広がりをもつものという認識も生まれるはずだ。地域の小さなかわりが、地球規模の課題につながる。その中で、被災→災害文化→新たな可能性の提示という、プラスの循環を想定することができる。ここに災害文化を中間項とする、災害のパラダイムの転

換を示すことが出来る。

1. 表紙 災害文化の力、未来に向けて

このセッションの総括をします。災害文化とは何か、災害のどこに位置づき、どのような役割と可能性を持つものか。ここに焦点をあてて、論じたいと思います。

2. 東日本大震災犠牲者、5歳区分、男女別集計

この図は東日本大震災の犠牲になられた方を、5経年の年齢別、男女別で集計したものです。源の資料は毎日新聞の2012年3月12日の紙面に公表された犠牲者を（氏名、年齢、居住地）もとに、お一人お一人をエクセルに打ち込み得たグラフです。

ここでは二つの点に注目しました。65歳以上の高齢者の犠牲が全犠牲者の56%を占めています。高齢者が取り残された、避難したいが避難できなかった、という事実が示されています。高齢者、動きが不自由な人も確実に避難できることが、避難体制の基本です。弱者を放置する、あるいはせざるを得ない状況は生まれてはならないと思います。人口構成で1/4を占める高齢者が、犠牲者の半数以上に達しています。この数値から日本という地域が抱える高齢社会、そこに横たわる深刻な課題が端的に示されています。

もう一点は、最も犠牲者数が少ない年齢層です。10歳から14歳。小学校3年生から中学3年生にあたる年齢です。小学生が20歳代の人より運動能力が優れているとは言えません。学校では集団で高台に避難した例が数多く指摘されています。岩手県の沿岸部の小中学校で、学校管理下での生徒・児童の犠牲は報告されていません。日頃の災害学習の成果を示しています。これは、地域全体に災害学習が展開し、避難が徹底すれば、ここまで犠牲を押しとどめることが出来るという姿を示しています。この数値から、減災の可能性、そして「未来に向けた具体像」が示されていると思います。

3. 災害をトータルにとらえる

災害を衝撃時にのみに注目し、そこに考察をとめては、災害の本質をとらえることはできません。衝撃にとどまらず、復旧・復興、さらに予知・警報の段階まで全体として把握することが必要です。それぞれの地域が持つ弱点や課題が、外部からの巨大な営力によって、一気に顕在化した姿が衝撃です。地域の課題は、復旧・復興さらには予知・警報のステージでも反映されます。災害は地域を映す鏡になります。復旧・復興のステージでは、その地域の将来像あるいは課題が浮かび上がることも少なくありません。各ステージで危機への対応がとられています。時には対応が新たな課題を生むこともあります。これら諸対応まで含めて

災害を問い直すことが、減災や復興をつくるうえで不可欠です。危機への対応を、災害文化という新たな枠組みを設けてみました。災害をトータルにとらえるなかで、災害文化が減災にむけて、有効な可能性を持つことを明らかにしていこうと思います。

4. 碑、慰霊、文学、芝居、オーラルヒストリー、展示館

文学、碑、記録、演劇、芝居、オーラルヒストリー、展示館など、ここにあげた7つの事項は、災害文化ととらえることが出来ると思います。これらの事項を、災害のステージのなかに位置付けるとともに、人間の基本的活動との関連を探ってみましょう。

5. 災害文化を人間の基本的活動と災害のステージを交差させ位置づけ、そのマトリックスを考察することとした。

これらの災害文化を示す事項を、災害ステージと、基本的人間活動の交差点で位置付けてみよう。基本的人間活動を、食べる、住む、学ぶ・知る、表現する、働く、移動、エネルギー、祈る・利他行動に置いてみました。災害文化を示す事項が、基本的人間活動を問い直すことにつながります。災害文化の活動に込められたメッセージが、受け取る側に響けば、新たな人間関係や活動が生まれます。この関係は、当初の災害文化の活動を問い直すことにもなります。文化を「危機に直面する技術」（山口昌男『学問の春』）と考えるなら、危機を乗り越えるため、地域に定着し、他地域に伝播することで、その技術が社会に問われることとなります。一定の時間軸を設ければ発展あるいは衰退する文化も生まれます。行為者と共に、他者へ、さらに、個人からコミュニティ、地域、国、地球規模にウイングを広げ、それぞれの地域課題に関連し、つながりを持って展開することを問うことが出来ます。災害文化が、個人、地域、国、地球規模の課題を問い直す、契機になる可能性を持つものとしてとらえることが可能です。

6. 災害文化を構成する事項をマトリックスの中に示し、さらに視野を地球規模にまで広げてみると

災害文化を構成する諸事項を人間活動と災害ステージを相互に関連させて位置させた図です。災害ステージをまたがっているもの、あるいは人間活動においても複数の活動にかかわるものもみられるものもありますが、できるだけ一つの交点にある箱に入れるようにしました。一覧表に落とすことで、基本的人間活動を見直す多様な契機が災害によって重層的につくられることを知ることになります。人間活動は社会とかかわり、地域、国、地球規模の課題に広がりを持つものであることも確認できると思います。災害文化が個別の減災をすすめる

共に、直面する地域課題への具体的対処を実現するものです。地域の具体的課題への対処は、国が抱える課題へつながることで有効性は拡大していきます。

具体的例を挙げましょう。衝撃直後、避難生活が求められます。田老の親戚の家に避難した例では、そこでは十数人が生活を共にしましたが、食事時になると備蓄してあった食材を高齢者がうまく料理し、それを共に食べた避難者が活力を得ています。その食事は田老地域での伝統食であり、忘れていた味を思い出すことにつながります。地域の食生活を問い直し、さらには地産地消、新たな食の開発まで展開する可能性も視野に入ってくると思います。あるいは、古井戸の復活を実現した例も宮古にあります。廃業したつくり酒屋で酒の原料水を提供していた古井戸をクラウドファンディングで復活、その安全でうまい水を介した交流、イベントが創られつつあります。復活や再生が新たに展開する点に焦点をあてると、可能性は広がって行きます。地域が持っていた「宝物」の再発見という良いと思います。ボランティア活動は、自らも成長し、活動を進めることで復興が加速するばかりか、他の被災地域でも多様なボランティア活動が展開します。行政側にも受け入れ態勢をつくるノウハウが蓄積されていきます。一方、東日本大震災では国際ボランティア活動が展開していきました。大船渡に拠点を構えたオールハンズは、世界各地とのネットワークの形成し、被災者が世界とつながっていること、支援の輪が広がり、孤立していないことを実感しました。

災害文化の伝播という考え方を一歩進め、地域課題への接近と解決の手法を災害文化から読み解くことが可能になります。焦点のあてる地域は拡大したり精緻化することで、地球規模の課題まで接近することが出来ます。伝播が単純な移行ではない点はおさえて置く必要があります。

7. 災害文化の特色と可能性をしめした

個々の具体的災害文化は人間活動を見直す契機になる。同時に人間活動から災害文化を問うという関係が生まれる。これが実現すれば、地域に根ざす文化に、さらに他地域へ影響を及ぼすものに広がっていきます。

災害文化が、コミュニティ、地域、国、地球規模に関連して、その課題や特色を読み解き、解決の道を探ることを可能とします。

この二点に災害文化の力を見ることが出来ます。

9. まとめ

災害は、地域が持つ弱点に集中して現れる。脆弱性の顕在化は、衝撃時ばかりか、復旧・復興時あるいは、予知・警報時でも現れる。災害を衝撃にとどまらずトータルに見ることが肝腎だ。この視座から、災害は、地域がもつ弱い部分に被害や影響が集中するという特徴を、災害を知る上でもっとも肝心なことです。

ならば弱点を知り、その強化に努めれば、災害を克服するばかりか、地域そのものが持つ可能性や豊かさを実現できるのではと考えることが出来ます。

そういう観点で災害を捉えなおす。そこには災害文化を中間項として、災害－災害文化－資源というマイナスをプラスに転換する、いわば災害の希望学というとらえ方が生まれます。災害について今までとはまったく違ったパラダイムの転換が展望できるのではないかと思えます。

【災害文化研究会会員・賛助会員の活動紹介】

- ・『一般社団法人雄勝花物語』 HP : <http://ogatsu-flowerstory.com/about>
雄勝ローズファクトリーガーデン、大川小学校へのオンラインスタディツアー実施。次回は、大川小学校への現地巡検をと招かれています。是非実現したいと考えています。
- ・「笑顔をつなぐ、ずっと…。」 三陸鉄道株式会社
HP : <http://www.sanrikutetsudou.com/>
問い合わせ先：三陸鉄道(株) 旅客営業部 TEL 0193-63-7727
地元では「さんてつ」として親しまれています。沿岸南北の足であり、沿岸の産業・文化の広報役でもあります。震災学習列車という企画列車あり。本研究会でも震災学習列車を借り上げてのスタディツアーを計画したいと思います。
- ・「もりおか復興支援センター／青山コミュニティ番屋」
問い合わせ先：青山コミュニティ番屋、019-656-1626
(9時～12時、月・日・祝休み)
内陸部へ避難した被災者の支援を行っています。「番屋」へどうぞお越しください。
- ・「NPO 津波太郎 (NPO 田老)」 HP : <https://tunamitarou.web.fc2.com/>
ブースで発表。本セッションで紹介のあったアンケートの詳細はそちらをご覧ください。災害文化研究会のオンライン研究会での発表も計画しています。
- ・「(社)社会的包摂サポートセンター(よりそいホットライン)」
HP : <https://www.since2011.net/>
日本中どこからでもつながります。相談相手として電話・FAX・チャットをご利用ください。
- ・「公益財団法人 岩手県国際交流協会」 HP : <https://iwate-ia.or.jp/>
災害を通して国際交流が深まりました。盛岡駅そばのアイーナ6階にあります。
- ・「シネマ・デ・アエル」HP : <https://cinemadeaeru.wixsite.com/cinema-de-aeru>
古井戸利用についてブースで発表。古い蔵を利用した映画上映、それを愛する人達の繋がりを覗いてみてください。
- ・「井田裕基写真事務所」 HP : <https://yuki-ida1986.com/>
問い合わせ先 : yida0328@gmail.com
‘さんてつ’で北へ、宮古にあります。井田さん撮影の人物写真は素晴らしい！

「災害文化研究会」は現在オンラインでの活動を中心としていますが、スタディツアーと研究大会、MLでの情報交流という日常活動に加えて、毎年『災害文化研究』を発行しています。「ぼうさいこくたい 2021」での本発表も同誌に掲載します。本研究会についてのお問い合わせは、下記までお寄せください。

災害文化研究会事務局

Email: saigaibunkaiwate@gmail.com

HP: <https://logos.edu.iwate-u.ac.jp/saigaibunka/>

～災害は社会を映し出す鏡です。被災した地域の課題の克服から希望を拓こう！～